

913.5

ソ

2

内藤益子

花

園の花二編序

春の華雲の清涼の夏野あまの愛あひさせ

ららは秋の花苑の兔道の雅郎子あやむらじ

眺ながむひひと夢ゆめ作りつくりますますす四時しじををむむく

みみ咲さくく草くさ木きももおおよよままううねねぐぐららひひふ

ああののああぢぢののききりりるるそそれれににたたぐぐつつあ

遊あそぶのあそびのあそび毎まい家け敷しき元もと中なか

かかがが流なが行りのの雲うみ花はな紋もん

六む出しゅつのの變へん比ひ之の何なに新あらた編へんのの

園えんのの花はな全ぜん都と六む老らうのの美み襖うすをを示しす

ままにに烈れつ女にょのの身み標ひょうをを背せ上うへままにに波なみ

不ふもも恋こひのの情なさけのの家けとと知しるる敵たけ亂らんるる

言こと葉はのの大だい那な子こ用もち意いのの家け元もとにに

子こ單たん紙しのの端はなは書かせせままにに出でるる

花はなのの玉たま命いのちのの人ひと情なさけ中なかのの解と

ああのの大だい那なのの兄あに之の春はる水みづ子このの薫かほりり

中なかかかのの花はなのの氣きのの批ひにに風かぜ成なり

聖せい頭とうとと背せ始はじままるる作しよるる文ぶん事じのの去きるる

菊の隠逸めぬ愚癡短才連
 の君子や笑えんと自ら羞く日紙
 経ぬ牡丹花毛の名ありお
 富貴と欲ふ販えが速可書よ催
 促舟園変身の毎下は清くあそ
 今も何を云出ん只護花鈴

の索は長き日に花壇の辺りに
 筆の筆目をつらふ而己

維時天保丙申春

湯臺山下

花迺屋桃嶺



かしこはる
 どのとつめ
 女
 鏡
 水
 櫛



つゆ
 女
 鏡
 水
 櫛



子以傘+

蝶 眠 早 見 や

夜 ち ゝ ゝ ゝ ゝ

君竹亭 子 孫 後



貞烈美談園の花二編の上

東京 狂訓亭主人補綴

第六章 花き

お園も乳母もやあなうく涙のこれて有け係が
まゝ遺文と探訪ろけ 罪今何といふ文章を讀み
たッけ子一樂ミ居の甲斐もふとといふ文章は
ぶヨ一ホニ 九板をいふまゝ一け子もあてて
まゝトアサお嬢さるゆそお引提をそナ

まゝも亦ある身みの難あい
いして我わがの私わが海うみ心こころ
恩おんのほは難あいのか
そのまゝ心こころとて身み探たづね
破やぶらぬ身みあはれとて
そらあき身みあはれとて
思まふもあはれとて
の法ほ令れい自じ志し忠ちゆう貞ていり

り願ねがひあはれとて
あはれとて
あはれとて
あはれとて
あはれとて
あはれとて
あはれとて
あはれとて
あはれとて
あはれとて

ねまどへいごめりううう三勝さんもお側小居なさ
る心りあたらぬけ身を二人まことの無理な願ひ
でございませう三勝さんごお祈りなしてございませ
ぬか目どくけてやさしきうートよも恍惚の性一倍
形赤らめささううむく守七も満足自一ヤ
モウ如女のあゝそのこの發女おのゝ果報りのご
三勝といひ其方とつひりづきかとうぬと類
そうい其方の心さう藤末おしそよのいのら

三勝も竹葉のうげかうさそ悦んでわやういの
司ホンニよくは仰ます。さうでございませう世
知るむのお嬢さあ何時も其お祈りなして
おあり抱なうそのお祈りなして私も安撫は
まもか爺さあは作抱お我候なうり出やう
と毎日くお案トヤして居ます。おモウく私がお
例小あらのでもモウ大丈夫でございませう乳で育
てかまひが我子のやうお思入のゝるまで浮世の



はびく〜とらふ〜ぬ〜
つらん〜ゆき〜とらふ〜
あう〜あ〜とらふ〜
あ〜き〜とらふ〜
のちと頼ひあけ〜

三勝

若旦那

くさ〜も〜あ〜の〜世〜
ともお〜す〜れ〜あ〜思〜ひ〜
ゆ〜り〜とらふ〜
落〜て〜ゆ〜ま〜
ま〜わ〜せ〜
送りも〜
今〜所〜
一〜筆〜とらふ〜

振ひりりとと君きみのの心こころをを憂うれふふ
心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふ
心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふ

群ぐんくくのの書しよをを一ひととと王わうのの心こころをを憂うれふふ
たたくく能のうくくのの心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふ
おおとと後ごへへ一ひとととおおのの心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふ
有あるる一ひとととのの美み人にん鳴な鳴な半はん七しちのの心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふ
娘むすめ終つひるる一ひととと抑おさへへるる心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふ

空そら幸さいふふとと父ちちのの心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふ
心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふ
心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふ
心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふ
心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふ
心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふ
心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふ
心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふ
心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふ
心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふはは心こころをを憂うれふふ

正のりそのおのむねのあまねども大匠 おのむね さんおのむねの扇あまねのあま
まののとはふありしととまろのへり
かのさ そのい その工 そのく その貴君 そのの その久 そのせと その公 その作 そのる そのの そのと そのあ そのの
お その人 そのが その官 そのを そのお そのま そのす そのと その云 そのま そのし そのと その貴 その君 そのも その志
と そのま そのふ その下 そのの そのま そのし そのと そのホ そのイ そのと そのれ そのの その志 そのり そのた その振
と そのけ そのる そのそ そのん そのる そのマ そのア そのそ そのれ そのお そのし そのて その乳 その母 そのや そのじ そのり
と そのら そのっ そのて そのら そのん そのる その何 そのも その面 その倒 そのし そのせ そのと そのの そのヨ そのハ そのイ
畏 そのの そのま そのし そのと その立 そのて その約 そのと そのそ その病 その命 そのを その用 そのひ そのら
れ そのね その六 その腸 その空 その論 そのも そのお その愈 その小 そのと そのそ その古 その方 そのも その弁

へ その一 その身 そのと その草 その沢 その医 その者 そのと その賤 そのし そのめ そのと そのん そのと そのと そのる
か そのり その朝 その簡 その医 その師 そのと そのり そのゆ そのく その頼 そのも そのあ そのる そのそ そのり
六 その投 そのと そのな そのと そのと そのと その殺 そのと そのあ そのり その六 その川
柳 そのの そのい そのと そのづ そのと そのは そのさ そのう そのし そのと そのの そのふ その極 そのり そのお そのせ そのと そのど
立 その流 そのや そのり そのと そのと そのな そのう そのく そのふ その由 その形 そのの そのな そのし そのぬ そのと その云
関 その附 その人 その目 そのを そのは そのく そのら そのし その染 その探 その結 そのし そのて その雲 そのの そのか その山
医 その者 そのと その六 その知 そのり そのそ そのも その裏 その家 そのの その医 その者 そのさ そのる そのて その六 その世 その間
か そのま そのの そのぬ そのと その病 その人 そのあ そのも そのと そのえ そのの そのを そのつ そのる その尚 その時 そのの

人情下るも上るもさうさうぶとそおけを
とする薬籠との光りとせせる流の医者
よりの乾簡医者の羅はあろくして人命
損ざるうまひありそよりの医師が務らひ
来て又如何なるうあるそよりの條下とよ
て詳ふ知りたゆか

第七章

さても稲田安幸八田恩深き半七方一と

りく来たるあとおしは魚谷の泉へゆると遠
ひあつたまりたるその風情安んははれて奥へ
通の半七と名をとりもとや和らぎて輕率
ゆて一さそくと名を洋しませんわ
ましとるれ親友もゆませぬゆまきたりて
之腹でもいふのませうが種くの取込がふん
しとて間もあく大病のイヤ既小地獄(橋宅
いふを辨せむいまりとす)ト笑ひるが

百人一首の不残ひゃくにんしゅのふぞろぎそんなして居ゐますまがあの中の
款くわんでいいまませんせん 一いんんどどああのの人ひとののいいままを
ああててままののああねね。トトキキニニ 和尙わしやうおおめめのの八やち実じつ二にのの
アアイイままがが正せい生せいののででごごののまませせうう 一いんんどどああののいいままを
阿アノノ二に條じょう院いん渡わたり波なみををごごののまませせうう 一いんんどどああののいいままを
これこれももごごののまませせうう 阿アノノ何なんれれいいせせにに乗のり除じよの上うへで
一いんんどどああののいいままををごごののまませせうう 一いんんどどああののいいままを
一いんんどどああののいいままををごごののまませせうう 一いんんどどああののいいままを
一いんんどどああののいいままををごごののまませせうう 一いんんどどああののいいままを

ままごごのの勝かち多たうう子こ 阿アノノ折ま角かくのの信しん切きををああののいいままを
ああののままのの今いまののううらら出でううけけややううトトおお墨すみとと乳ちち母ははののいいままを
ららひひくく菊きく平へいととおお奴とね隸れいととれれ庭ていのの水すい門もんよりより舟ふね
おお宗むね彼か菊きく平へいがが楫かををああややととりり 忽たちちち塚つら地ぢにに
ああのの切きてて安あん幸きやうのの方かたへへいいりりけけはは 一いんんどどああののいいままを
おお客きやくごごトトのの女によ房ぼうのの花はなででおお 一いんんどどああののいいままを
おおののいいままををごごののまませせうう 一いんんどどああののいいままを
幸さい夫ふ婦ふのの酒さけ肴やくをを用もち意いををごごののまませせうう 一いんんどどああののいいままを

半七の酌あれあるあ娘めをりつあるあ女かと
顔か見えあのせくさりりり一ヤアアそろか
三さん勝かつふしてマアア世よをきと思ひの
外わトあやあむむ拓たく子こ三さん勝かつも先たらののち
涙なみあて猶なほ豫よまりが思ひ切く半七の側わきへ
より三つつりうごごいままとト膝ままか
ううく生解げも身も代もあらうごふる人卧や
人ひと目めも私もうらりうままま嬉うれしいるまままごご

道理道理なる半七を見て安あ幸さふあらうと
笑わらひながら一まんとあの色いろ紙しの正美み々
ごごいまませう人とを知らねからうるを
あらうモシ且那なごうでごごいまま何なん程ほど發は
明あかお方かたでもこれをうりの知しませんごらう
一ヤモウ何なんごうままごうらう秘ひ人ひと羨あらうやアらう
めらう今日けもけあらう書あらうを續つて一
とま不ふし七居ゐごごいまままらうらうらう

狐きつね小こでも化かされハ志こころまいらトとここづづるら也や
三さん勝しょうを流ながるる涙なみだを押おぬぬびび一いちそのそのああららうう
ぐぐひひハハ流ながるる涙なみだででハハここぞぞののまませんせん死あかそそととららうう
今いま日ひのおおめめのの日ひ柄がらがが立たちちもも序こと時ととと忘わす
ままささぬぬ笑あはれれののおお顔かほををせせ夢ゆめみみ見みああははここそそ時とき
ハハ猶なほりりややままささるる丸がん腦のうととややりりモモウウくく誰たれかか何なに
とと中ちゆうままりりててもも美ぎ理りままるるむむとと笑わらひひれれててもも今いま
ささささ思おもひひ切きりここととハハ出で来きまませんせんかかららとと流ながるるよよ

そそハハ見み捨すてああハハ不ふ便べんくくれれてて下くだささいいすす
安あん事じささるるののかかううけけをを命いのちととななままくくささいい三さん
勝かつそれそれハハ親あんな族ぞくももああよよななぬぬハハ笑わらいいのの
おお情なさけををまま笑あはれれ君きみくくああれれををよよううくくかか顔かほ
ハハ中ちゆう上じやうままをを一いちヤヤモモウウああれれもも同おなトトここととららうう
かかららううくく美ぎ理りどどををししてて流ながるる異おけん見みせせるる
ゆゆゑゑおおそれそれううけけはは方あたもも入いりりてて事こと子こににのの往ゆき
ととののせせめめてて年とし前まへがが存い生きて居ゐることことららうう折とるる

あゝを樂しき事もなきに死んごとく
と死を憚る死すかと思ふこと
何今ゆゑに見捨るものこそ
もどふしと命をきりつけ
由がごとく身と投るとの遺書
父も伯父も柔らぎひのやう
さうさう見詰の橋の中程
さうさう見詰の橋の中程
さうさう見詰の橋の中程

下お女の死がいか
野邊の送りも何もかも
の情をけ半七も
らきて念以不回向をせぬ
不死骸を見たり其併も
まゝ思ひ物を半七が
るる人の周果でけやう
とまゝと歎と身も

泣く夢うは場が羨りまごも迷ひが賞や
らぬト狂来の正とく又えふけさ

貞烈美談園の花二編の上

時流にそつとらうイヤ、よりる女房

と其方ハお伏酒でも飲、せたまもあれ

むらうりが私のお頼ひをそかろく下さり

ませ頼とまるとむらうりやせもが附る娘

葛のテテンをるれごあま、わくけん小馬鹿

とわらひる其振る美をま節が何所よあは

りのう子一ヲホ、イヤアめらう、三勝

さんの笑顔はま見と修だヨモウく安幸

由安堵あんどりううまました。トキニこんや今夜の物語ものがたり。

頃ころの七月十三日のち残る暑あまの孫ひまままるる愛あい小こ死し

医師いしや一人ひとり去いるるもも美び藤べいのいろ色を男をとこ余よ去いるるのよ用もちで

方かたよりより腰こし小こ疊たたまふふ小こ提た灯とう端はをを浴ゆ衣い小こ

黒くろ紹しやうのせ羽う折お一ひと羽はりり流ながるるままでももありりままををままん

ツつットつ東とう西せい。東とう西せいくく川かわ小こ川かわををわわららいといと犬いぬ

ととどど市ち原はら辺へのへ去さ方かたへへ来きつつつつととううととま

おお生なま醉ま其その好こ一ひと倒たふれてて正せい醉まををううととああんんと

ままるる耳みみ元もとへへ風かぜののろろととももおお入い江え町まち鐘かねいたいた。

ハハツツのの時とき醉まてももままをを取とりり南なん無むとと分ぶん。

仕し舞まとと公こう附つるる題だい目め講かうをを返かへすす顔かほのの出で。

云いひひけけせんせんといいととままをを告つぐぐとと呼よぶぶ見み結むすの

橋はし上の上ままるるんんががりりああままのの形かたち勢いきほハハテテああやや。

とと伺うかがひひるるがが彼かれがが後あとへへ逃にげげづづとともも知しららずず。

のの上うへ何なにももああららずずとと表あははれれととりり。

其その風ふう俗ぞくたたららずず身み投なげげとと口くちををたたりり。

はまらぬかり合ふるりもあまううと用ひ
あまうよりく入合を其申よとや思ひ切命
の際一ノ声ワアと泣出た。イヤその声の拍
あれサトクバニ勝はらうりまうにアレマア
噓をかばあナニ其振れ泣はあるのりヲ一ノ江
それの大違ひあの時ハナガ九死んでお生でりのヲ
あまうと泣くう泣るいう所存トるのり一ノ夜
中の時鳥トヤアあるまのり泣くう泣るのり

あつる争ひとの。それうう流へ一ノそまて時鳥の
茶納うアレサくさう雑言てふゆません
何とツけナニサそれううやうと合せ南無
妙法蓮華經くとか題目と二三遍唱へて
既お花込をけ方も一生懸命おのり死止る成
ビツクリーアレまをあしてあうしてあうはる
あうとりし声さてもあまれとあさる声音と
終るるさまを無理お後一ノあうてか奥を見

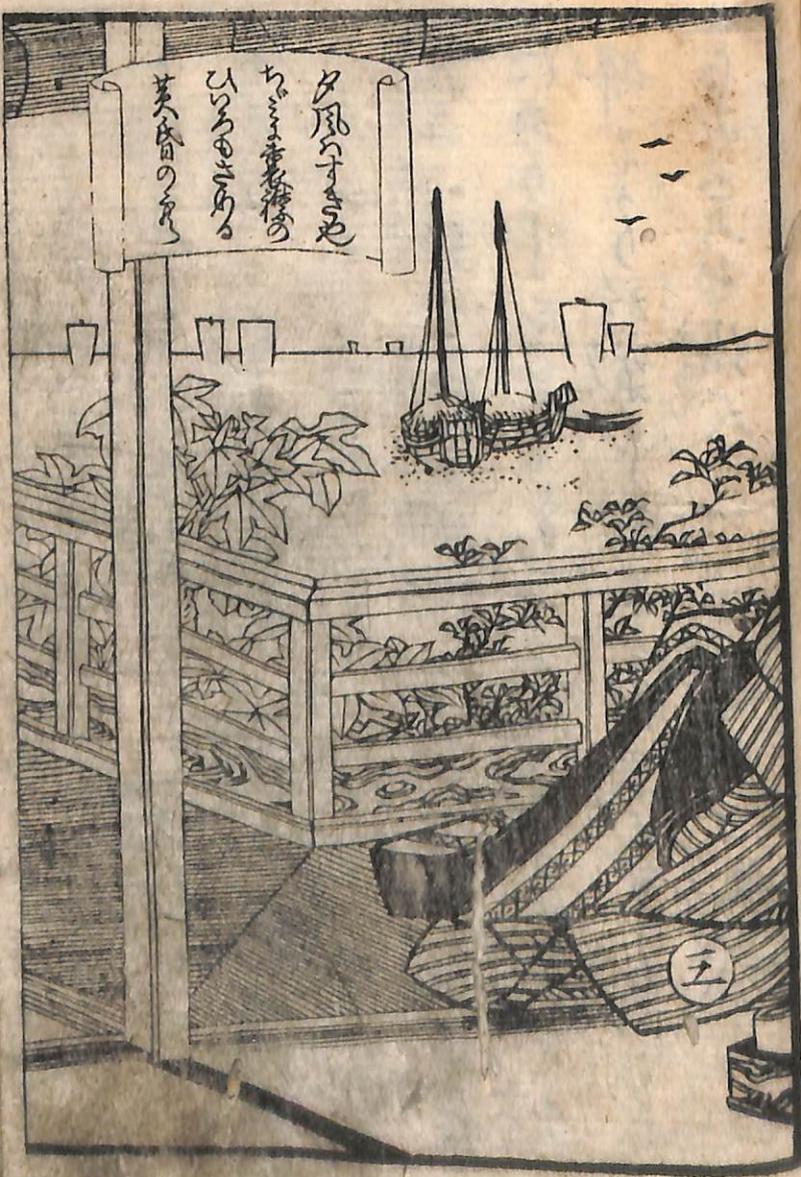
るおろろと勝まおんく付ん大忍人の友人の多ちは方ちもつ
夢ゆめでひるいうとめ眼めをむむり亦またあつてんでもお
その人ひと娘むすめのむすめ一向いこう来きもつま死しるせてれうと
あせるのをとあらかりかまてつアまの公こうと静
ゆくよく見みえととめり我等われハ安あん幸こうハ
ハテこれハあまりまをつけられヨゆめ田た安あん幸こう張
兄あにとまをまてらソリヤ魚とまらうと一ヲイく和
尚せうさんモウモウ文章ぶんしょうや声色こころかりを止て地を

てえん妙みょうハアアアアア酒さけでもあ
らるハいくまくまくいれまんと思おもつてアア
そこで子若わか且また那な私わたしがままとあやアコレ三勝さんママ
ごうのんど死まと覚かく悟ごあるままハ何れ容
子すのあるとどろよがマアくせらまと私ハ紙とま
らるハませ入膝ひざとも終お合あ若わか且また那なとあり
捨すて他ハ色でも仕るまらうとれが取られてあの
ありまめりと云いハ三勝さんがアイくとアレ

まのむらさき^{まのむらさき}の^の花^{はな}を^を浮^うき^きて^て
くば^{くば}り^りま^ませ^せん^んと^とす^すま^まの^の花^{はな}を^を浮^うき^きて^て
所^{ところ}で^で私^{わたし}が^が云^いふ^ふの^の文^{ぶん}紙^しを^を今^{いま}も^もあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^る
ま^まの^の死^しで^で花^{はな}見^みの^の出^で来^きや^やせん^んの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^る
正^{ただ}ら^らあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^る
ま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^る
と^と云^いふ^ふま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^る
紙^しを^を吹^ふく^くま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^る

ま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^る
ま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^る
ま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^る
ま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^る
ま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^る
ま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^る
ま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^る
ま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^る
ま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^る
ま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^るま^まの^のあ^あら^らる^る

夕風らすまは
ちのこをなげの
ひらりもさあ
美代舟のえり



あつくりとつるいで帰るは家の内やうく
と引んでも「たが忠」くそ泣きうり「そこ
で夫婦がせそ夜の辱審」逃ることいさ「
て手水お初おもお二人さん」たんくおの落着
け子「練」お厚いお源切ツイやどされて「
にあり」ことどもとまぐと「歩」お安事「ま
婦」をうりお案「トあ」るる他人「お」
らまどよぞ他人「お」合「お」其代りおま

由丸るぞお居るがよの若旦那も「お」
中て来る程「お」楽「お」んで居るせ「お」
つむお死ぬ案「お」あ「お」若旦那「お」
やう「お」世間「お」中「お」と「お」解「お」
お茶友旦那も「お」恥「お」を「お」刺「お」
無理「お」と「お」は「お」け「お」無理「お」
お会「お」集「お」「お」ところ「お」
得「お」お「お」さ「お」さ「お」

死し収と来きもも為なららずず一一七七日日とと過とせせ七七半半
たたるる書しよををままどどととああげげてて極きよくのの中ちゆうにに伯はく父ふのの所しよにに
たたるるにに必ひつ定ていままとと取と取と一一ととああららるる事こと
それそれににはは安あん幸きやうらら命いのちをを代たがへへももおおううままひひ中ちゆうにに
大だい船せんのの乗のりとと思おもひひををおおししななせせとと頭かぶ母ははしし
おおららるるにに死し収とののとと止とめめららずず私わがもも安あん堵と一一日日二二日日
見み合あひひのの他ほかのの身みをを投なげげのの死し骸がいを見みつけつけてて三さん疇しゆう
とと心こころをを沈しづめめてて葬まうすすをを一一とともも尊たうと一一何なに所ところの

おおららるるににああららるるにに何なにののここととともも一一おおままのの身み
代たがへへににたたららずずととああららるるにに母ははののととおお頭かぶ目め
頭かぶ目め講かうをを思おもひひををおおししとと帰かへるる途とち中ちゆうのの橋はしのの
上うへ身み投なげげららるる其その人ひともも同どう信しん者しやののおお頭かぶ目め
介かへへららるるにに早はや那なのの所ところにに死し骸がいををままととああららるる
備びへへららるるにに結むすぶぶにに免めん角かくのの破やぶれれけけぬぬででもも
ああらられれとと一旦いつたん切きららるるにに思おもひひををおおししとと死し収と
ととたたれれももかかもも思おもひひををおおししとと今いま日ひををああららるるににたたららず

知るものがるいゆもしるゆふをぢて後世
一い 安 出られもせぬと堅意地ゆ多思ひ分
二風の異見 三 下 三 髪を切て居てハ半
七さゆと呪阻の中同トつととよやらことひ
身の罪隙 安 それトやふ依て半にさるゆ姿
と習ウエまふ居ろとあこと 三 下 三 髪を切れば片時
も二ツ鬘コトがらやふありま 安 直カア鼻カアの入
髪と一お借ウリすてはねふ毎時ウツのお好カアるカアひくカア鬘

徳田 安 一 三 下 三 明日旦那とと 三 一 三 下 三 髪を切るるる紙
髪取風俗 安 一 三 下 三 髪を留ると知つとゆ名 カア 鼻カアふカアる
内お終ウリ去ウリる 三 知カアせカアもカアまカアいカア状 三 一 三 下 三 それカアきカアりカア何
とも 安 女カア作カアまカア公カアの内カアでカア六カア樂カア一カアとカアふ 安 一 三 下 三 待カアてカアおカア居カア
とハ百も美知所カアでカア鼻カアアカアがカア俄カアのカア病カア業カア地カア約
のる 安 ぬカア愚カア老カアのカア身カアのカアうカア人カアやカアりカアくカアるカア業カアのカア業
で 安 金カア快カアそカアまカアりカアるカア今日カア尊カア居カアまカアで 安 一 三 下 三 髪を切
て来カアるカアれカアのカアら 安 一 三 下 三 髪を切カアりカアたカア和カア尚カア

して單物も突一ツ本條の縮面縫りと京
條の三重瓶のをくらりてのひまゝと帯と
新ぶしと袷合で十二支三あぶとらまゝ
一さうであらうまゝ一安幸も借金とあ
らゝ一美君のお母一まのあ名い何と
まをへ一フウまど知らうらゝ一まゝ一
産でい委一のこ六知れません一赤根養之
進さト歩て三勝もらり一ヲやくとんごと

でございませとそれでおれ用人の名の憎井男
三とら中ませんら一フそれお違ひるいごよ
して知つて居らうごよも悪い奴ら一いさう由
おらるゝあゝ一その男三の妹が本産の偏
父の嫁でございませと一フウそれで先日男
三の甥ごととまゝ二十支をうりの男と中小性
お出し一うが本産の後弟でらるゝ色の白
随分宜男どが少一あやけ風のヲそま

たとえどのやうなることがあつても見捨みすてはせぬせぬ十じ廿じ
中ちゆうとささるるささるる洋やうそれそれはた扱さうと安幸あんきうも何なに所ところ
へうへう行ゆて志しままららく蠟燭ろうそくが消きええるるささぬぬで世よもも
トて自みづかたたままかかるると三勝さんしやうへその自みづかととかかささ
アアレレママアアお待まちるるささいいまま一一物もの角かく氣きを利りして
たたららししたたりりのをのお吐はきししの暗くらくくつつても出で来きままいい
トトなるなる一一の中うちおおたたやや九くの鏡かみアアレレ子こ刻ときとそそふ
でございいまままま意い地ぢののううららひひ夜よの短みづかいいことと

たたままくく帰かへるとお作おしやくとと今いまままらら一一張しやう為な入いるる
ももよろよろ志しままららくくののまままま久くけけ後ごううお止とどままるる
のの一一まませんせん一一々々ままままのの蠟燭ろうそくををららつつてト
自みづかたたくく安幸あんきうのの咄はなははけけててららううそそくくと扱さう束たば
一一イイヤヤ素すの利りははあありりと生なまの暗くらくく中うちがが照ありり
るるががいい暮くらら子こフフウウ引ひと三勝さんしやうさんさんのの嬢ぢやう一一そそふふ
お親おぢいのの一一嬢ぢやう一一くくららくくつつてておおいいててまませせるる一一組ぐみ
ととここととででございいまま一一たた扱さういいらられれててるるモモウウ

跡ハ何ともいふことの出来ませんアアアアと来の
強クおありするさうさうちがひ正直なもん
トお折節半七の紙入の金を不残紙のう
みりごう 半おせう 和蘭さん今も少しさだんく
の深切殊小種々の買物さうを困るであらうが
今日ハ持合がまのママ是を取て送るえん
ト小判小粒のまとりあて二十兩ほど紙小らく
と巻て安幸小渡一 半さうりさお膏折

のかれの跡さうまるヨ一エモシは折あ入ません
是でいさよもと嘘志をのりさうくく
お柔小さらりまをくり 半柔でか紙りヤ
まを疎まありさう仕合 半ナニくそれの買物
の代をうりご命の乳ハ別お去やまを
お頼さうあるテ 半何でさうまをさう
外のおとでるいが三勝を入れて
居ハは道折小あるまのり 半

こもまづ表が黒漆で間口が二間半奥が五
間七尺の内二尺が土をさし七二階の所の間口と
同トと漆の平家まじり狭いが湯釜もあり雪
隠ハ別小細い好ま撮の小窓さしの通を建て
約とあり窓々々裏店が見えるのがまじり
派々ア圍具之と四角羊もあり庭小お窓
る石も入てあり一尺越の松も縁日仕入てあり
市松の畳とり所があやしの料理茶屋め

けれと不省し一間の當脱のむききと除
あしそらり戸附の格子小でもきれいとそれ
ハ何所あるのさアエナニそのうおる宅で格
りふるとやととサアアはまう後入とのふ
せアホ私ハ其板を家があるとヤスとあり
と存トありさアアの癖とまらめるな
しとと思ふとらりでも其板ふこととせ
それの燈と実正のありまはなはまらめお

大丈夫と何でも例へ引つけ酒の貴はうる亮と鶴
 卵のにおるんをの髪の中禁持持美の私に比加減後
 陰陰火陽を節々用ひて平し酒を溢れさせ
 ヲツト身上秋尊衣裳安ん奉る多々せん平ホ安ん一
 との何のこでとさひまま正一天の中地の中これ一枚
 平勿辨るいとをいひ坊さんどとこれより又お
 酒をうら後て其夜ハ別れて帰らり
 貞烈美談園の花二編の中終

貞烈美談園の花二編の下

東京 狂訓亭主人補綴

第九章

存命てま思ひ絶男の為小身退きあはらぬま
 一とるれと死るねあう取仕義とをり既小死まべ死
 その所を安幸の助小依死をさまれれば縁の糸
 も切ぬ誠の相合て再會しる半七のいれもうら
 ぬ深切小まら丸腦のたれやと別まらあこと

うつくしと寐ねられぬ不おもふ思おもひ結つめぶすぬりくまや
約やく未みと案あんト苦く勞ろうふ目め由ゆありて明日あしたとりひ
半七はんしちのたよりを待まちて樂よろこしまああせし翌よく日ひ彼かの
家いへと買かひとの細こま女め男おとこの召めい仕つかまま何なん足たらぬもたなく
弟あとう首くび尾びをあけければ姉さいりんくもるく是これ
より三さん勝しょうハ安あん幸こうの方かた一いつ日ひくくふ青あお信しん半七はんしち来き
るとたのしくくくく一いつけるぐ半七はんしちも日ひ毎まい通とほひ水みづ
ぬくささとと契ちぎりける期きて代程あやぶ五ご六ろく日ひ遠とほざらり

しゆゑ半七はんしちハいいくくお思おもふ三さん勝しょうハ待まちもられて後
みると儀おとけななりりもああひひええんと巨こ魁けいハ寄よりて轉うつ寐ね
の枕まくらええふふ種たね彦ひこの諸あ國くに物もの語ごといいふ合あ巻まきと梅うめ
見こ與よ美みといいふ人ひと情ぢやう本ほんが借かりてあり物もの前まへ且かつおおささる
がたたぬ入いままししこといいふ声こゑゆゆて紀おき上あがり昨日きのうはままさ
おおるるんとと
水みづ納の戸のの山やま牛うしも宿しゆく面めんの小こ袖そでと寐ね巻まきの上うへお
りりそのそのをを引ひ掛かて後ととりり若わ夫おとこ編あ半はんとと入いる
といいふふりりややここるる心こゝろハハままららししももななけれれとと思おもひひた

即ちつても美しくく次の間(出迎ひ)お早ふ
のつとあやのまうこ子あうひるハ毎日お結
中まうこ一さうぶろうヨおれ由四又日用が
重ツて来るこが出来ないう練小志まいたる
とぞあぶ塩梅いいう随分身と大切ふ
安産まるがいく今日ハ天分顔色がこりのやう
どナニ何所もるんともなごのませんが今朝
控助がきたあゆえさうとわうたのでは

マ一と一そ息のつりいことご安来月帯とあめ
るのトやア秘へる随分氣とつけるヨハイ素
とほけて辰まをヨ一平そ男の子を平一お
ののど一フヤコさう一平女の子を平うごぶのま
ハ一平女でも男でもゆるうなやく産が宜一フヤ
馬麻ら一平あををかまらさのま一其月で
かりつて六ふ一七早く生まれまらあ
このつとあうこそりやアそうと酒でものを

後三ら一三た今三た振中対まりたマア三表三衣三で
もお水ま着き智ちあそをまを一トキニ和尚を吸ふををる
くくんあ一三モウ控助とをりましト小時
前三稻田安幸一安一ハイ今日ハありぐふ一三牙ヤ能く
お宅であらうけ後一物角角鳴ふあわけてもお苗
主まどとりけるいとお案トヤまう一ヨ一待兼
ととのいふがあんまり早くそてまご一向か者も
何も濁ハ後ト小所へまうく酒着も出て替

らく三盃ことありて三勝ハけ程求り一三味線
とりどろ一細子と合せて一久一おりどろ何
そおかうらりナ一安一ごよしてくけ間ハさらうらり台
ません一半一マアく酒をかのれ吞してかうサ
三一それでもたんと醉と寤そか志まひどり
と一安一サカくた振あう完務でかうる振るこも
でもトうく六結りませうト扇を持く膝成
速一安一一エハク



とたろり ければ母は大きふおどろきておそ
心といふあけるまてまて半七ハ産せし男の子を
半次郎と名附て乳母と抱へ大切小そそ明
朝ハ半次郎の宮入りなりとて三勝ハ女とも
に向ひて申す 且那由早く申出さるる今約
の扱ふおそくつてあるるいヨ定成刻時分ど
と思ふく私由申出さるるヨ乳母由一同由麻を
ドレちつと申出を抱て見やう 申すお抱扱

お世実ふお鼻かとかは元ハ貴嬢お生うつ
か目つきハ且形お其候何れお似やてもあ
こいらしハたうていござりませか 申す笑ひ
そりるおんごるよ 男児方ハおそうてさ
まはま 廿乃く申母上の膝へお出抱せし折
節に重裏に上り。おそそたをけてくごさ
ト 笑らるるやまより一さんお慰ちられ三勝を
め家内の者驚させけるハ独り見れば女

りづれ甲乙こうごひまうりけりうくそお霜しもの二勝にしょうふらひつけれ
 娘むすめの髪かみと結むすぶんと鶴田つるでんに結むすかれバニツツやくお霜しも
 ヤヤおさ嶋田しまづふゆの久く半元服はんげんぷくでお在いざのものととツツ
 不ふんんふふ九く折せででごごののままししけけ子こ九く折せるるまま婦と
 奮まふふでももいいししませせうう亭君ていくんとお放はなれれああそそババささぬ
 探さぐふふトリトリりりれてて娘むすめのの莞あつこ念ごころとと公こうののううちち小悦こえつひひけけは
 髪かみととむむままよよ中うちふふ二勝にしょうのの其そこ所ところふふとと取と片かた付つけさせ
 三三おお嬢ぢやうさんさん明日あしたよよくくお宿うちののお名なやや何なんううととおおせせや

てお使つかとと上あがませせううママ今いま晚ゆふははんん々々お休やすままさ
 いませませ二にイイありりうう津つ小こ厄やく分ぶんあるるりりませせてお
 糸いとのの毒どくででととごごひひませせトトいい中ちゆうふふををままくくも
 寐ねうう二勝にしょうとと娘むすめののままくくとと並ならべべののううるるままややむむまま
 ひけん春はるのの夜半よはんとと明あけややままくく短たんよよむむもものの音ね
 閑暇かんげあ小庭こていよりよりささーーへへ日ひ々々ささ人ひと階かゝままににうう
 了りょうそそややううくくふふ紙かみ立たてて二勝にしょうのの娘むすめのの向むかひひ下したレレままをを
 さんさんハハ志し介けふふおお紙かみるるさんさんままーー末すえ其その紙かみおおかかそそく

いざいませんヨ おすめ 一ハイわりのごふつひで勞れは
うツイたんときせりまうと記出て朝の仕舞
すま 海田中十女が取次 おすめ 一モシあるとどのの女中か
か出るされまうと おすめ 一ヨヤさう久とどの何人もお出
るのたうと おすめ 一娘お向ひ おすめ 一モシやま娘のお定
でいざいません久 おすめ 一とよりとて私うはさか居
まはとをたれが存トませう おすめ 一するやとたれ
ごうへませう おすめ 一コウお民や何とらつて来このとん

おすめ 一ハイお通さぬとらけ方でございませうとぞお目
みかりと おすめ 一のとやま おすめ 一と おすめ 一とより思ご おすめ 一ハイ一す
んま おすめ 一と所が五十女の茶屋かを おすめ 一生色色の編
子の皮布とやらと着てお連のお方も おすめ 一と
ま おすめ 一そんな おすめ 一ママ おすめ 一奥の座 おすめ 一死 おすめ 一お通 おすめ 一
てお茶でも出 おすめ 一する おすめ 一と おすめ 一の おすめ 一ハイ おすめ 一唯今 おすめ 一化粧
おを おすめ 一居 おすめ 一ま おすめ 一ま おすめ 一う おすめ 一う おすめ 一少 おすめ 一お おすめ 一待 おすめ 一下 おすめ 一さ おすめ 一の おすめ 一ま おすめ 一と おすめ 一
中 おすめ 一ハ おすめ 一ハ おすめ 一く おすめ 一ト おすめ 一ま おすめ 一て おすめ 一幼 おすめ 一備 おすめ 一ひ おすめ 一て おすめ 一三 おすめ 一勝 おすめ 一の おすめ 一娘 おすめ 一お おすめ 一む おすめ 一



「た招るゝお嬢さんお宿（の）かぬお認めあてを
せお宅（うち）でもさそお案内（あん）していらつゝあやのせう
私（わたくし）ハちよつとお客（きやく）（お）挨拶（あいさつ）さるどいつて糸（いと）ト
まをトまよ上（あ）り「お霜（しも）や視（み）おをあげたるヨ
「まことにモウいろくおせうとさゆにありまし
て「何（なに）さるをり糸（いと）ハつまませんヨ「今（いま）お客（きやく）
さるかお揚（あ）さんをお抱（かか）るゝおまもて誠（まこと）にお
見（み）ごとあやしめていらつゝまやのまも「可（か）やくとらう

久（ひさ）トお目（め）おからふト「一（い）間の隔（か）紙（し）さるゝとあけ
客（きやく）と見るよりむつり「何（なに）あものりおま轉（ま）び
伏（ふ）泣（な）て負（お）さんあけさるゝ三人（さんにん）来（き）り「客（きやく）中（ちゆう）
「けくおどろく女（に）客（きやく）「アヤとよるさるゝ
何（なん）ゆゑか疑（ぎ）さるゝさるゝまもとよ「お疑（ぎ）うつら
「ませんトあや「むやうさ三（さん）勝（か）ハ勝（か）くは負（ま）
とあけ「お見（み）ごまもと疑（ぎ）さるゝまも「お疑（ぎ）
もかろつて居（ゐ）るまも「お面（めん）目（め）次（つぎ）第（だい）一（いち）もとさるゝません

が私わたくしの三勝さんしょうでございませう。お爺おやさる由母上おははさる由
免めんさされて下くださるまう。ト、少まほてあきれん三人さんにんの
中なかおも皮布ひふを着きたり。女おんなハ年七ねんしちの母はは真心まごころ
院いん三勝さんしょうの側そばへまうり附つるんと。おまゝ人ひとが三勝さんしょう
だと。ト、つゝ引ひ起おこして良見よしみ合せあまうと
むくりおどろろまうり。が、真まこと眉毛まゆげハおとてゐるの
くれど七なな才さいの時ときも片かた時ときも側そばを放はなれぬ三勝さんしょう
ト、やどよしとあふト、やあまう。良よとえつあそ

居ゐりける十平じゅうへい夫婦ふうふも死したり。娘むすめハ再會さいかい
まることされバ嬉うれし涙なみだを押おぬぐひ。ト、とてく。とんぞ
こけもある。いのちもよも実まこと正ただの振ふでゐる。良よマケ
ふりふ沢たくで生うまうて居ゐる。早くをうしてせ
る。かりたやうく。ト、せりまられ三勝さんしょうハ後あと涙なみだの
なそ。かくり。がやうく。ふおとあつめ。始はじめ終おわりを
はゆびうたをなせ。三人さんにんハその辛あつ苦くと探たづね
不ふどと感かんト入いらう。合あふと。道みち理りれ。良よ真心まごころ足あし

けふきこ
 今日来りしハハ程羊七の身持あり家内
 居つぬ其仔細いさふとけある娘が出来てそれ
 世給してあく由に弟の正なるふつぬと受て
 勝と知りぬぬ金でもとせせて縁を切ぬぬ
 安堵させ申すと十年ま婦ふ相控し來つてえれば世
 と去りし一三勝るればさくよ半七が身持も無理
 らぬと三勝ふ力とつけ一三勝るるるとも小案ト
 まい言た一通り受ぬぬ嫁むののと思ふであら

たといはししたるの意も其身小るればまゑとけぬ
 るうと知りし意地づくで無理を仕方も出来ぬ
 ののこれいそれぬ引えて縁の道と立と布一男
 に出世とさせやうと其身と捨る貞女の瀬はね
 女子が他ふありふろ今度の正いばとて何所までも
 引清て嫁のお室あゆむとて理をたすて頼んぬ
 又さるるく受とけのるの子でもるのお後づくおまゑ
 八五(一)そと方と引とて随分世話も仕置ぬぬ

上る條より
息はいつく居たりける

○これよりお園三勝が貞操戀情の然
歎擲三編引はき出来仕ひ

貞契美談園の花三編の下



満寿
花

